

第1回中部 NGO - JICA 中部地域協議会議事要旨

1. 開会挨拶

大貝（JICA 中部）

中部の NGO と JICA 中部はこれまでも良好な連携・協力関係を持ち、協働作業を実施してきたが、改めて、初めての試みとなる「地域協議会」という形で会議を設けることには意義があると考えている。昨年3月11日以降、東京と地方、途上国と日本の関係性が変化し、相互依存、双方向性の重要性が一層認識されるようになった。

この「地域協議会」を通して、中部地域から地域の課題に対する新しい取り組みなどに関して、東京や他の地域にも様々な提案、問題意識や協働作業の成果の提示等を行って行くことが重要と考えている。今後、ご参加の皆様方とともに、この地域協議会を充実したものに育ててゆきたい。

2. 出席者自己紹介（出席者リスト参照）

3. 本地域協議会新設の経緯

小樋山（JICA 中部）

配布資料（1）に従い説明。

4. 協議事項「地域協議会実施要項案」

森本（JICA 中部）

配布資料（2）に従い内容確認。

大貝（JICA 中部）

表記について、要項案の冒頭に目的「NGO等団体（以下、地域NGO）」とあるので、4. 2)の「NGO」、5. 1)の「NGO等」、2)「NGO」という記載は「地域NGO」に統一すべき。

西井（NANGOC）

NGO企業 JICA の協働分科会のフォローという言及があったが、地域協議会に企業が参加する可能性はあるのか。

龍田（NANGOC）

メインはあくまでも NGO と JICA だが、BOP などで3者で協働している事例があれば可能性はある。また、協働の事例があれば JICA や NGO から紹介した

り、スピーカーとして招聘することもありえる。

龍田 (NANGOC)

実施要項の「NGO 等」の「等」についての補足説明であるが、日本で NGO という
と国際協力の NGO と捉えられることが多いが、この協議会では国内の問題、開
発教育、地域の課題に取り組んでいる団体、NPO や市民団体で、この協議会の趣
旨に賛同し、公益を作ろうとしている団体、市民団体も参加できるということ
で「等」を加えた。

山崎 (NANGOC)

この協議会がなくてもこれまで協働してきた。あえて作る根拠を共通認識とし
て明記すべき。2011 年は時代の転換期であり、発想を原点に戻す状況があった
国際協力の状況も変化している。協働を深めたいという意味以上に意義をもつ
はず、時代性、積極的にとらえることを期待したい。

小樋山 (JICA 中部)

JICA が置かれた状況や 3.11 以降の内外一元化の議論に見られるように、国際協
力と地域活性化を同じ次元で考えられるようになった。NGO 側からも、JICA も
軌を一にしているとの認識いただいているのではないか。状況の変化、JICA の
取り組み、立場の変化のうえに立って進めたい。

龍田 (NANGOC)

国際協力を目指す者同士として、お互いに何をめざし、協議し、何をやってい
くか、発信することが重要。両者で取り決めをして、誰にでもわかるように発
信すべき。この協議会の議事は公開する予定。これまで必ずしも他の人から
見えないところでも協働してきたが、今後は表に見える形にして、他の人から
も見えるところで発信していく。公的セクター、NGO セクターも社会からより信
頼を得ていくという意義がある。

山崎 (NANGOC)

新しい公共という概念で実際の政策も動き始めた。行政だけでなく、市民、NGO、
企業も公共を担う時代であるため、具体的な問題意識・課題を文章化すること
で多くの NGO が参加しやすくなる。もう少し具体的に、問題意識、課題を書い
てほしい。

公共の担い手の市民をして何を貢献できるのか、背景、動機を書き記しておく
とが重要。時代が変わると人も変わるので、変遷、趣旨が引き継がれないこと

が多いので、何が課題か、その都度書き留めることが、多様性を大切にする組織として継承することが大切。

小樋山（JICA 中部）

一つの方法として文書「本地域協議会新設の経緯」にこの議論を補足、記入する方法がある。

他方、地域 NGO と JICA 中部が協議する器をつくったので、どのようにやっていくかは参加している方に考えていただくことが重要。山崎さんの発言も議事録に載ることになる。議論を重ねメッセージとして出していくこと、参加者の意思表示を重ねることで気持ちが記録され、広がり、発信されることになるのという、議事録に残す方法がある。

大貝（JICA 中部）

地域独自に協議会を開催するのは JICA としても初めてのケース。会の方向性について現時点で必ずしも明確にしているわけではないが、この協議会で議論した事例を共有し、発信することが重要と考えている。国際協力の分野においても、これまで「官」が実施していた部分の一部を「民」が担い、それを「官」がサポートするという動きが出てきている。JICA も NGO を始め、民間の方々と連携・協力して実施して行くことが多くなっており、これまでのやり方では、必ずしも対処できないこともあり、いろいろな方々と相談、協議することが重要となっている。そして、そうした議論をオープンに発信することは意味があると思う。

西井（NANGOC）

3.11 以降の NGO の活躍、緒方理事長の「内外一元化」の動きを受けて、JICA、NGO が視点を「国内」の「現場」にも向けるという変換があった。この変化がこの協議会設置の後押しとなっている。ここで発信することで、国際協力や地域の課題に興味のある団体に伝わり、議論が深まるのではないかと。協議会設置の意義、意味については別のペーパーを作成する方法があるのではないかと。

小樋山（JICA 中部）

実施要項案は東京で行われている全国版協議会の要項を参考にしているが、全国版にはない特色として、目的に「地域社会の課題に取り組む活動の向上を図る」を加えている。この点に想いが込められている。

この協議会を設置する想いを議事録に残すという方法ではどうか。

竹内（NANGOC）

地域社会の課題とは具体的にどのように想定しているか。

龍田（NANGOC）

広い意味でとらえている。国内貧困、高齢化、過疎化、東海大地震対策なども課題で、議論する必要があるれば議論する。国際協力に取り組む団体として取り組む課題、地域に特化した課題など、どの課題に扱うかは協議のなかで決めてゆけばよい。

竹内（NANGOC）

地域の課題は、NANGOCの政策提言員会でも議論している。NANGOCとしても地域の課題、会員のニーズに合った課題を取り上げることは重要と論議はしているが、どういう行動をとるかは今後の課題。

龍田（NANGOC）

地域協議会細則に議題の決め方を定めている。今回も1か月前に議論したい議題を募集した。その中で提言いただければ協議することとなる。

西井（NANGOC）

NGOセンターとしてこの協議会の発足経緯や意義、また新しい公共、新しい課題を判りやすく広報し、この協議会の意義を説明できるといい。

龍田（NANGOC）

次回協議会の議題となりえるので、今後、この協議会の意義について納得したものをまとめることとし、公表していくかたちで進めてはどうか。

大貝（JICA 中部）

NGO、JICAそれぞれで協議会の主旨や意義を考え、取り纏めて行く作業を協議会の運営と同時並行的に進めていくということではいかがか。

森本（JICA 中部）

この協議会の意義については今後同時並行で議論を続けることとし、地域協議会実施要項については、表記に整合性のあるように修正のうえ、採択することとする。

5. 協議事項「実施細則」

龍田 (NANGOC)

実施要項案が、地域協議会全体のきまりであるのに対し、運用細則は、運営上必要となることをまとめたもの。運営は双方が出し合うコーディネータからなるコーディネーター会議が行う。細則の見直しが必要であればコーディネーター会議で改訂し、地域協議会に報告する。

杉本 (CDIC)

参加手順について参加者の名簿交換は前日までということで大丈夫か。

龍田 (NANGOC)

地域 NGO 側の参加手順は、事前に団体として参加登録行う。協議会の都度、出席者を連絡することになる。団体登録が済んでいれば、その団体からの参加者が前日に申し込んでも実質的に対応可能。一方、団体の事前登録していないと参加できない。

NANGOC 加盟団体でも同様に事前登録が必要であるが、加盟団体、N 連無償と草の根技術協力の実施団体の審査は簡略化する。

杉本 (CDIC)

参加登録は毎年行う必要があるか。

龍田 (NANGOC)

参加登録は一回のみ。協議会の都度、誰が参加するか連絡いただければよい。

山崎 (NANGOC)

登録の要件は何か。

龍田 (NANGOC)

登録したいと申請すること。

小樋山 (JICA 中部)

資格要件としては、協議会の趣旨、目的に賛同する団体であることが要件となる。違う趣旨、目的の団体の参加は想定していない。

龍田 (NANGOC)

なお、議事録は発言者名を付してつくり、逐語でなく要旨をまとめ発言者に確認する。

6. 協議事項「時期、タイミング、議題」

森本（JICA 中部）

原則年2回実施とすると、次回は7月もしくは8月の開催ということになるが、それでよいか。

小樋山（JICA 中部）

1月～2月はおおよそ国会で予算原案がまとまっているので、来年度方向性が説明でき、予算を踏まえ議論できる。8月は概算要求がおおむねまとまるため、来年度に向けた要求について説明できる。2月と8月頃の実施が望ましいと考える。

龍田（NANGOC）

全国版協議会と重ならないようにすべきだが全国版協議会年4回あり6、9、12、3月であるがずれることがおおい。1月～2月および、7月～8月に実施するところと妥当。議題は開催の1か月前までに募集するため、その前に議論の設定について大まかな議論することとなる。

山崎（NANGOC）

NANGOCは事務所を移転し、十分な会議場がとれない状況。高山などからの参加者の交通費も懸案事項。地域協議会での決定事項はJICA中部の範囲内に及ぶという理解でよいか？

龍田（NANGOC）

JICA中部に関連することは及ぶと考える。報告、情報は全国に発信する。

大貝（大貝）

拘束力を持つかどうかは別にして、よいことであれば他の地域にも紹介したい。

竹内（NANGOC）

場所の他の場所の可能性はあるか。

龍田（NANGOC）

交通費については、協議の場であるので、原則NGOはNGO側で負担し、JICAはJICA側で負担することになる。

開催地は原則JICA中部および名古屋NGOセンターとなる。テーマによって柔軟

性を持たせるという意味で原則と記載している。

山崎 (NANGOC)

地域の課題に取り組む NPO、市民グループも参加者として視野に入るか。

龍田 (NANGOC)

JICA、国際協力 NGO と協働したいという申し出があれば参加しただくことになる。

山崎 (NANGOC)

申し込みが来るように議論を広げたい。

6. 報告事項「協働ハンドブック作成について」

龍田 (NANGOC)

配布資料 (3) に添って説明。

7. 報告事項「中部地域の NGO と JICA 中部の協働の実績」

(森本)

配布資料 (4) に添って説明。

8. 報告事項「NGO - JICA 協議会の動き」

龍田 (NANGOC)

配布資料 (5) (6) (7) に添って説明。

本年度第 4 回の協議は名古屋で行い、テーマは地域連携。NGO、JICA 国内機関からの意見聴取もしており、双方の意見が含まれる内容となる。

9. 報告事項「JICA 中部の最近の動き」

大貝 (JICA 中部)

配布資料 (8) に添って説明。

10. その他の事項

龍田 (NANGOC)

海外青年協力隊 (JOCV) の OB は地域の NGO の職員として働くことが多くなっている。ソムニード、ICAN、AHI など、人材交流は進んでいる。

震災復興支援については、NGO、JICA の双方でできることを紹介、提案、議論できるとよい。

大貝（JICA 中部）

今回は NGO による震災復興の支援実績を紹介してほしい。

戸村（NANGOC）

震災復興支援は 3 年にわたる支援計画をつくり先を見据えて取り組んできた。2 年目に向け新たなプロジェクトの実施を含めて検討していく方針。今後も意見交換していきたい。

竹内（NANGOC）

戦争と平和の資料館ピースあいちで 2 月 28 日から 4 月 21 日に震災と戦争展をする。戦争中から末期にかけて、東南海地震、三河地震があった。情報統制などのテーマから東日本大震災と関連付けて展示する。

中島（NANGOC、AHI）

JICA 中部の 4 つの柱のうちのひとつが人材育成であり、NGO と JICA の人材育成について次回以降、事例を紹介し、学びあう機会を作りたい。JICA が公務員の研修を中心に行ってきたことに対し、AHI は NGO ワーカー育成 30 年続けてきた。人材育成のノウハウの蓄積は双方にとって重要な課題。NGO が住民自立、組織自立を働きかけるうえで、地方自治体との協働が不可欠となり、自治体職員の育成がカギとなり、JICA の公的部門の人材育成と重なり合うことがあるので地域保健の在り方についても話し合いたい。

澁谷（JICA 中部）

JICA では研修員受入を既に 40 年近く行ってきたが、研修の意義、すなわち、どのような研修を「良い研修」とするのか、は時代により変化している。現在では、研修を単体で考えるのではなく、プロジェクトやプログラムの「投入要素」として、全体のなかで位置付けを明確にして実施することを重視している。一方、プロジェクトのニーズを適切に把握し、外部機関と最適な連携関係を構築しながら成果を出すことは簡単ではない。そのような試行錯誤の経験と、その中で蓄積してきたノウハウが JICA のみならず NGO 側にもあるのではないか。こうした知見を交換できれば、お互いにとってメリットがあるだろう。開発効果の最大化のために、まずは双方で問題認識を出し合うところから始めていくことが重要であると考えます。

閉会あいさつ

西井（NANGOC）

議論が沸騰した、時間を短く感じた。なぜ、この時期に設置するのか本質的な問いが提起され、議論が盛り上がった。ここまで来るには、以前から草の根、広報研修などでの連携を進めてきたが、広い視野から協議してもよいのではないかという想いが双方に芽生えてきたところに大きな事件が起こったことをきっかけに地域協議会という形で具体化した。これから2回目、3回目と回を重ね、議論を深め、相互に学びあい、補いながら、活発な議論する場として発展することを期待したい。

以上